

平成二年四月十日 発行

定価 一八〇〇円

(本体一七四八円)

著者

神沢有三

発行者

福澤英敏

印刷

日本図書刊行会
印刷部

日本全国歌人叢書 第105集
〈若き日のモンゴル〉

発行所

〒112 東京都文京区音羽
一―一五―一二―三―三

(株)近代文藝社

電話 03(九四二)〇八六九

振替口座 東京七・六八八七五

日本全国歌人叢書

神沢 有三集 — 若き日のモンゴル

目次

蒙古行	7
イシツク湖	17
モンゴル学の恩師・麻生達男先生との永別	20
麻生達男先生を偲ぶ	
戦後初のモンゴル旅行	24
果てしなきゴビ	
小型機でホジルトへ	
テレルジへの旅	
ウランバートルでの寸詠	
国立博物館	

モンゴルとの別れ

田附富雄兄千恵子さんと結婚	45
モンゴルの夕べ	46
モンゴル研究に感あり	48
新春寸感	50
トムルトゴー客員教授と	51
モンゴル学の権威・後藤富男博士逝く	55
ダムバダルジャー大使と共に	57
モンゴル映画の試写会	59
大阪大学での日本モンゴル学会	61
モンゴルの夕べ	63
言語文学研究所長・ロヴサンデンデヴ教授を送る	65
北京を経てモンゴル共和国を訪る	66
折ふしに詠める歌	77
日本モンゴル協会長・松崎陽先生を寿ぐ	80

ソ連からモンゴルを経て中国へ……………	82
ウランバートルより北京を経て帰国……………	
国立小劇場にてモンゴル音楽を聴く……………	93
京都大学での日本モンゴル学会……………	94
新春偶詠……………	95
ツェレンドンドヴ新大使着任を祝ふ……………	96
追悼歌……………	97
ダシユブル理事官夫妻を送る……………	98
チングルタイ内モンゴル大学副学長を迎へて……………	100
内モンゴル学術代表団歓迎の会……………	102
ダライラマ猊下を迎へて……………	103
たまさかに詠める歌……………	105
昭和萬葉集掲載歌……………	107
私と短歌……………	109

蒙古行（昭和十八年）

ひたすらに望みしことの成りし今などか淋しく
学舎を去る

出で立ちて帰り来る日の無きものと思ひつ
仰ぐ故郷の山

わが責めは坦ひて重く果てしなく出で立ち行
かむモンゴルの野に

民族の血の近さかなモンゴルに入りし頃より
心高鳴る

憧れしモンゴルの地に着きにしが連なる山は
ふるさとに似て

貧しきに一夜を請へば粟粥をもてなしにけり
包グルのあるじは

（包グルは中国音では「パオ」モンゴルの人の家）

髑髏や魔王が舞へるそのさまは夢かうつつか
この世のさまか

（葛根廟の祭）

南海の藻屑となりし学友を偲べば酔へぬ今日
の盃

（モンゴル草原での宴）

モンゴルの貧しき民を救ふべくわがうつせみの総てを捧げむ

国恩の尊きことの身にしみぬ蒙古の果てにひとり来りて

入浴はせずに堪へても三匹の虱の為せる業には勝てず

仏にも三匹の虱とふモンゴルの諺ありと師は語りたり

王侯の姫との恋も甘き夢しもべのごとく酷使
さるとは

（王侯の家に寄寓、モンゴル語を学んだ学友の話）

王侯は旗民を常に文盲の立場におきて泰らかなるか

（一モンゴル青年の嘆き。旗は県）

草原の彼方に見ゆる黒点を待つこと久し祖国
の便り

（月に一度のトラックの来訪）

奥地にて憂きことあらば吾が名をば語れと述
べし言葉たがはず

（菩薩と呼ばれた麻生教授の言葉）

ラマ寺で小豆蒔く世をなげきつつ師はぜんざ
いを持成しにけり

（戦時食糧不足―モンゴル人は元来農耕をしなかった況してラマ僧は尚更のこと―）

ビタミンの足らざる日日を今日もまた野蒜あ
さりぬ蒙古の子らと

遊牧の生業^{なりはひ}かなしいとし子を寺にあづけて去
りしハラフン

（ハラフンは僧以外の人）

牛肉を食べるや否やと僧は問ふ羊肉尽きしラ
マ寺の朝

（モンゴル人は羊肉以外は通常食べなかった）

手作りの葱たづさへし中国の老爺の情ありが
たきかな

獐猛の性やいづくに草原を食足りたるか狼の
行く

小狐の振り向き走るそのさまのいとど愛らし
モンゴル草原

アルカリの土質のゆるかステップのあやめの
花は地に着きて咲く

果てしなく熱砂を行けば道の辺の褪せし花び
ら喘ぐごとくに

はるばるとダブス・ノールの果てまでもわれ
を送りしモンゴルの友

（ダブス・ノールは塩湖）